

---

# ピロシキ

闇夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ピロシキ

### 【コード】

N0253B

### 【作者名】

闇夜

### 【あらすじ】

あるお昼ご飯に青年がピロシキを食べるお話。

(前書き)

これは作者が空腹だったので書いたただけのものです。

気が付けば店の中にいた。

『ロシアの名店』とか書いてある店。

とても素敵な繁華街にある店。

客は多くもなく、少なくともなかった。

店員がメニューをもってきた。

そこにはたくさん料理名が書かれてあった。

ロシアの名店って言うぐらいだからロシアの食べものだろう。

一通りすべてに目を通して見るが知っている料理名は一つしかなかった。

店員が自分のテーブルを横切る。

「あの、すみません」

「はい、ご注文はお決まりでしょうか？」

「え〜とピロシキください。この当店おすすめのやつ」

「はい、かしこまりました。」

店員はそう言うつとすぐに立ち去ってしまった。

お昼ご飯がピロシキ

どうかと思ったが変なのを頼んでサラダ系のが出たら困る。

まあ、いわば安全な道を通ったのだ。

小心者め

そんな事を思ったが判断ミスではないと思っっている。

しばらくすると店員が料理を運んできた。

熱々のピロシキ、湯気が立ち上っている。

「おまたせしました。」

店員の人はピロシキが転がらないように慎重にテーブルに置く。

ピロシキは相変わらず熱々のままだ。

揚げたてなのかまだ油が少し付いている。

小麦粉の皮でできた生地はもう見た感じぶっくらしている。

一口丸かじりする。

ふっくらとした生地が口の中に入っていく。

まだ中身の具には達していない。

しかし、驚いたことに小麦粉の生地だけでもおいしい。

ふっくらとした生地を噛むことによって生地が圧縮され小麦粉そのものの味がでてくる。

そのうえ揚げてあるので、表面はパリパリしていて中のふっくら感と絶妙にマッチしている。

これを具と一緒に食べたならどれだけおいしだろう

考えただけで唾液がとめどなく出てくる。

なんとなく辺りを見回してからもう一口食べる。

今度は予想通り中身の具が入り込んできた。

中の具はおそらくひき肉、春雨、椎茸、その他いろいろだろう。

今度は生地とひき肉その他いろいろの交響曲が始まった。

口の中で作り出される交響曲はみごとにマッチしていた。

ひき肉の肉汁が出てくるところなんて最高だ。

満足感に満ちたりながらも口を休めることはなかった。

気が付くともうピロシキはなくなっていた。

すごくおいしい、あゝもう一つ食べたい

そう思う唇下がりがりだった。

(後書き)

これって小説なのでしょうか？

それとなんでもいいので評価してみてください。

お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0253b/>

---

ピロシキ

2010年12月4日18時46分発行